

〔学界展望〕

東欧における絶対主義の形成

土 肥 恒 之

一

一八世紀のロシア、とりわけその初頭のピョートル一世の北方戦争の勝利と「西欧化」的諸改革によって、ロシアはヨーロッパの「辺境国家」からその国際政治のヘゲモニーを握る大国へと転化した。この戦争と改革を通して、ロシアにおいても軍事・官僚制的な絶対主義体制が確立されたのである。だが「西欧化」という規定それ自体に示されているように、確立された絶対主義体制の起源を一七世紀ロシアの国内的諸条件だけに限定することはできない。当時のロシアをとりまく国際的環境、とりわけ一七世紀のバルト海の覇権をめぐる北東ヨーロッパ

諸国の厳しい政治的動向に注意しなければならぬだろう。「西欧化」とはいえ、北欧のスウェーデンの諸制度も積極的に導入されたことの意味は、この点を考慮に入れてはじめて理解されるのである。¹⁾

本稿は、以上のような関心から、ロシアもその一つである東欧諸国における絶対主義の形成の問題について、とりわけ対外的諸関係の重視をうち出している最近の新しい見解をそれに対する批判と併せて紹介することを狙いとしている。もとより西欧とは異なる東欧の絶対主義という問題提起は、これまでも皆無ではなかった。また一七世紀の北東ヨーロッパ諸国間の国際的な諸関係についての研究は、長い伝統をもつ専門分野であり、大変

な蓄積があることも云うまでもない。だが両者の統一の把握によって東欧型の絶対主義という新しい歴史像を描き出そうとする試みは、比較的最近のことのように思われる。以下では文献的には限られたものではあるが、この問題の現況について展望することにした⁽³⁾。

(1) Peterson, C. *Peter the Great's Administrative and Judicial Reforms. Swedish Antecedents and the Process of Reception.* Stockholm, 1979

(2) 例えばR・フューアハウスは、第十回の国際歴史家会議(ローマ、一九五五年)のR・ムーニエ報告における東欧と西欧の絶対主義の区別の提唱、それに反対するF・ハルトツェンタに対して、ムーニエの方に組している。

Vierhaus, R. *Absolutismus. — Sowjetsystem und demokratische Gesellschaft.* Bd. 1 Freiburg 1966 S. 30. なおマルクス主義史学と非マルクス主義史学の絶対主義の概念を整理し、一九六〇年代初めまでの研究動向を検討したフューアハウスの、このしばしば引用される論文は、最近次の論文集に収められた。Hinrichs, E. (Hg.) *Absolutismus.* Frankfurt am Main, 1986 S. 35—62.

(3) 我が国では、島山成人氏が一八世紀のロシアと、とりわけプロイセンとの政治過程の多くの類似点を挙げて、「東欧の絶対主義」の可能性を指摘した。「一八世紀のツァーリズム」、「ロシア史研究」四一号、一九八五年。本稿は、

これに対する筆者のコメント(「東欧の絶対主義——島山報告に寄せて」)を若干敷衍したものである。したがって多少の重複があることを、あらかじめお断りしておきたい。

二

一九六八年からほぼ五年間にわたって、『ソ連邦史』誌上においてロシアの絶対主義をめぐる諸問題について活発な論争が展開された。この論争については、既に幾つかの紹介があり、ここで繰り返すには及ばないであろう。我々の課題にとって重要なことは、この論争に参加したただ一人のヨーロッパ近代史家A・H・チストズヴォーノフの論文「絶対主義の発生問題の若干の視角」⁽⁵⁾において、きわめて明快な「中・東欧型の絶対主義」論が展開されたことである。チストズヴォーノフは、この論文において絶対主義の発生に及ぼす影響には国内的な諸要素と対外的なそれがあること、したがって国ごとの絶対主義研究においてさえ「複合的研究」(комплексное изучение)が必要なこと、とりわけスペインそして中東欧諸国における「絶対主義的統治形態」の成立においては対外的諸要素の果たした役割が大きいこと、等を指摘

したのである。以下では、これらの点について具体的に紹介しておこう。

チストズヴォーノフによると、「中東欧」、即ちオーストリア、プロイセンにおける「絶対主義的統治形態」の形成においては、これらの国の内部における封建貴族とブルジョワジーとの間の敵対、というマルクス、エンゲルスの古典的命題とは「あまり関係がない」。ただし、そこではその社会経済的発展の主導的な方向は、封建反動、「再版農奴制」にあったからである。オーストリア、プロイセンにとって、その初期に絶対主義的統治体制を促した契機は、ハプスブルグ帝国の中央集権化政策の失敗、三十年戦争の惨めな結果、またヨーロッパ諸国家体系の一般的な前進傾向、等の「対外的諸要素」に他ならなかった。これらの厳しい諸条件の下で、国家の自立的存在を守り、かつ強化するためには、自分のところにも「絶対主義的な諸秩序」を導入することによってのみ可能であったのである。⁽⁸⁾

以上のようにチストズヴォーノフは、中東欧における「絶対主義的統治形態」は、フランス、イギリスのように「前進的な」社会経済的発展から「論理的に」生じし

た「絶対主義」とは異なり、そのためには「まだ未熟な社会組織に接ぎ木された」(この点においてスペインも同様である)。したがってそれは、「とくに粗野な専制主義」の特色をおびたのである。⁽⁹⁾他方、ロシアにおいてツァーリの無制限な権力が出現したのは、一六世紀後半であったが、この場合も封建貴族と発展するブルジョアジーとの間の「力の均衡」としてそれを理解することはできないし、まして農民の階級闘争の単なる激化からこの現象を説明することもできない。イヴァン雷帝の統治期における絶対主義的秩序の最初の要素の出現は、この時代の対外的脅威及びそれと密接に結びついた支配階級内部の鋭い抗争によっている。続く一七世紀には、農奴制の土壤のうえで勤務士族が上昇し、常備軍の萌芽が現われ、中央及び地方の官僚制が整えられた。国家権力への教会の従属もみられた。一八世紀に入ると、ロシアはかつてのようなヨーロッパ諸国家体系の遠い辺境の状態から、その有機的構成員の地位への移行が完成した。こうしてオーストリア、プロイセンと同様、ロシアにおいてもその「絶対主義的統治形態」は、ブルジョワの発展の土壤ではなく、農奴制の土壤のうえに形成された。その

際モデルとされたのは、ヨーロッパ、とりわけフランス絶対主義の理論と実践であり、「外面的な装置」だけが植え付けられたのである。⁽¹⁰⁾

チストズヴォーノフは、こうして中東欧における「絶対主義的統治形態」の発生における対外政治的、とりわけ軍事的要素を強調したが、もとよりこれだけを決定的とみているわけではない。「一つの側面だけを取り出し、それに普遍的な鍵という意義を付与」するような研究方法は、「教条主義を導くだけである」からである。⁽¹¹⁾だが外からの軍事的脅威や内乱が国家の存在そのものを問題にしたこと、更にそれがあがる段階において中央集権国家の絶対主義への転化を促す「触媒」の役割を果したという事実は、それとして承認されなければならない。絶対主義の発生の問題は複合的に研究されねばならず、経済、社会、政治、国際関係の全体が、したがって「対外的諸要素」も研究に含められねばならないのである。

チストズヴォーノフは、概ね以上のように、「自然発生的なブルジョアの発展の土壤に」形成された「言葉の固有の意味での絶対主義」、イギリス・フランス型という「第一の類型」とは別に、そのような発展の完全な欠

如、あるいはきわめて弱い発展のもとで、同時に農奴制または封建的従属農民の他の最も粗野な搾取形態のもとにおいて、支配階級によって上から「植え付けられた」、「第二の類型」、即ちオーストリア・プロイセン・ロシア型の「絶対主義的統治形態」を析出した。(スペインは、第二類型の変種か、両者の中間に位置する) いずれも「貴族の政治的支配形態」であることに变りないが、第二の類型は、農奴制的秩序をその崩壊の影響から、即ち先進資本主義諸国の直接的侵略から守るために、「西欧のモデルに農奴制的内容をつめ込む」。その意味では、これをレーニンに倣って「農奴制的絶対主義」(крепостнический абсолютизм)と呼ぶことも可能である。もとより絶対主義は不変の、進歩のない政治的上部構造では決してない。それは発生、上昇、下降の諸過程をたどるのであり、第二の類型は、その第一の類型へと近付いた。だが前者は後者よりも一世紀以上も生き延びて、民衆には大きな重荷となったのである。

絶対主義を二つの類型に区別して、中東欧のそれについてはマルクス、エンゲルスの古典的命題の適用を避けて対外的諸要素、とりわけ軍事的脅威を重視するチスト

ズヴォーノフの論文は、ソ連史学界において好評をうけた。だがこれについては、既に簡単な紹介があるので、我々は引き続き、チストズヴォーノフに基本的に依りながらも、更に大胆に「東欧の絶対主義」に関する理論的展望をうち出しているペリー・アンダーソンの、一九七四年に発表された大著『絶対主義国家の系譜』⁽¹³⁾の紹介に移ることにしよう。

アンダーソンは絶対主義を近代世界における最初の国際的な国家システムとして理解すると共に、これを西欧(スペイン、フランス、イギリス、イタリア、スウェーデン)と東欧(プロイセン、オーストリア、ポーランド、ロシア、トルコ)の二つの類型に区けて考察している。まず西欧の絶対主義についてのアンダーソンの見解を、必要な限りでごく簡単に要約すると、その本質は、農奴制解体後の封建的支配の再編にある。即ち経済的搾取と政治的、法的強制が一つに溶けあい、有機的に統一されていた農奴制が、地代の金納化を経て消滅にむかい、領主・農民間の人格的関係が希薄になるにつれて、領主は農村においていぜん支配的な階級として農民を伝統的な社会的地位におしとどめ、政治的、法的強制装置を

農村のレヴェルからより高度な国家のレヴェルへと集中せざるを得なくなった。その結果が、官僚制と常備軍をそなえた絶対主義国家の形成であり、したがって西欧の絶対主義とは、その支配を脅かされた封建貴族の「新しい政治上の甲殻」(the new political carapace)に他ならない。絶対主義の主要な機能は、社会のヒエラルキーの底辺にある農民や平民の政治的、法的抑圧にあったのである⁽¹⁴⁾。

以上のようにアンダーソンは、マルクス主義の立場から西欧の絶対主義の階級の本質を規定したが、もとより「都市ブルジョアジーの勃興が与えたインパクト」についても多くの頁をさき、「力の均衡」理論を放棄しているわけではない。だがここではこの点の指摘にとどめて、次に東欧の絶対主義についての彼の見解に入ることにしよう。西欧の絶対主義とほとんど同時代に形成された東欧のそれについて、アンダーソンはまず「再版農奴制」との関連から検討をはじめめる。だが、どこでも両者は年代的に一致しない。けだし、プロイセンのグーツヘルンヤフトの拡大は一六世紀であるが、そこで絶対主義が形成されたのは約一世紀後である。「再版農奴制の古典的

「ポーランドでは、絶対主義は形成されなかったし、ロシアの場合、両者は年代的にはより接近していたが、ここでも農奴制が先行した。したがって東欧の絶対主義には、西欧とは異なる別の形成要因を考えなければならぬ。アンダーソンは、これを外からの、即ち西欧諸国のインパクトに求めた。一五六〇年代以降にはじまった「軍事革命」(military revolution)は、西欧諸国をして東欧の広大な地域への侵略の可能性を以前よりもたかめた。したがって東欧の封建貴族は、「もし生き残ることを望むならば」、集権化された国家体制、即ち絶対主義の採用を余儀なくされたのである。⁽¹⁵⁾

アンダーソンは、こうしてまず東欧の絶対主義の形成に果たした外からの軍事的脅威の役割を強調したが、もとより西欧諸国のすべてが東欧の直接的侵略にでたわけではない。東欧諸国にとりわけ脅威となったのはスウェーデンであった。西欧の絶対主義のなかで最も若い、新興国家スウェーデンが、一六三〇—一七二〇年の九〇年間に及ぼしたインパクトこそ、東欧諸国を絶対主義へ大きく傾斜させた主要な原因であった。三十年戦争こそは、まさしく東欧へのスウェーデンの進攻の決定的な開

始であったが、その後その軍隊は、五つの首都(モスクワ、ワルシャワ、ベルリン、ドレスデン、ブラハ)へ勝利のうちにのり込んだ。一六五〇年以降の大選帝侯によるプロイセン絶対主義の建設は、差し迫ったスウェーデンの脅威に対する直接的レスポンスであったし、ロシアのツァーリ権力は、バルト海でのスウェーデンとの覇権のための闘いにおいて試され、鍛えられた。こうして東欧諸国は、「東欧のハンマー」(the hammer of the East)スウェーデンから絶対主義の「形成上の衝撃」をうけたのであり、ポーランドに至っては、スウェーデンからうけた致命的打撃から回復できず、絶対主義を根付かせることができなかつたばかりか、一世紀後にはついに独立国家としての存在さえ止めたのである。⁽¹⁶⁾

東欧における絶対主義の形成を、この時代の絶え間なき領土獲得戦争のなかで生き残るために支払われた代価として位置づけるアンダーソンは、それと共にもう一つの役割を指摘する。即ち東欧の絶対主義は、各地で発生した農村における階級闘争、具体的には「再版農奴制」やマナー反動に対する農民の様々な抗議行動によって生じた社会不安に応えるものでもあった。農奴制のスタビ

リテイを保証するためにも、政治体制、軍隊の強化が求められたのである。したがって農民の叛乱は、東欧諸国の貴族層に求心力として作用し、その対外的決定を補い、完全なものにした。東欧の絶対主義は、こうして封建貴族の階級的地位を、外国のライヴァルからと同時に国内の農民からも守る役割を担って登場したのである。⁽¹⁷⁾

アンダーソンは、以上のように絶対主義がエルベ河をこえてヨーロッパ共通の現象となったものの、西欧と東欧では明確にその系譜を異にしており、封建制の不均等な発展が東欧をして西欧の国家構造に鈎合せしめたことを強調した。更にこうした結果、東欧の絶対主義には戦争、軍隊の影が西欧のそれよりも濃厚であること、他方、ブルジョワの不在、勤務貴族の出現といった特質が生じたことも併せて指摘した。東欧の絶対主義に関するアンダーソンの見解は、ごく大雑把には以上のように要約できるのだが、ここで我々は、改めてチストズヴォーノフの見解との類似に気付かされる。もとより、これは偶然ではない。アンダーソンは著作のなかでチストズヴォーノフ論文について、それが「若干の粗野な判断（例えばスペインについて）を含んでいるが、この比較の試

みは、恐らく東欧と西欧における絶対主義の諸起源についての最近のソ連の討論のなかでは最良のものである」として高い評価を与えている。⁽¹⁸⁾最後に我々は、東欧の絶対主義にかんする両者の見解の異同について簡単に整理することにしよう。

まず東欧における絶対主義の形成に及ぼした対外政治的諸要素、とりわけ軍事的脅威を強調する点で両者は完全に一致している。この点については、云うまでもなくチストズヴォーノフの指摘が先行したわけだが、アンダーソンはこれを受けて、更に具体化させた。とりわけスウェーデンの軍事的脅威を取り上げ、これに最大のアクセントを置いたのである。その当否はさて置き、チストズヴォーノフ論文においては、スウェーデンに関しては但一カ所、三十年戦争における勝利国の一つとして「スウェーデンの勃興」(поднявшаяся Швеция)に言及されているにすぎないのである。

次に東欧の絶対主義を類型として設定する方法についても、両者の間にほとんど相違はみられない。チストズヴォーノフは、その論文を収めた近著(一九八五年)のなかで、一九七〇年代以降の絶対主義研究の動向を概観

しているが⁽¹⁹⁾、その中でアンダーソンの著作を次のように評価した。アンダーソンの本には若干の欠陥が認められるものの、絶対主義を複合的な、システムを有する現象として検討する著者の方法は、科学的であり、また展望のあるものである。更に研究にさしつけて採用された「地域的区別」(regionalization)、「地域的類型化」(regional typology)の方法は、筆者(チヌストスヴォーノフ)の概念と「直接的に関連」しており、これこそが「専門家のあつたでのアンダーソンの本の著しう程度」の成功を決定した⁽²⁰⁾のである。

植 民 地 学 界 (139)

- (4) 高田和夫「現代ソ連史学界と絶対主義——絶対主義論争(一九六八—一九七二)の検討」、『歴史学研究』四五〇号、一九七七年。Torke, H. J. Die neuere Sowjethistoriographie zum Problem des russischen Absolutismus. — Forschungen zur osteuropäischen Geschichte. H. 20 1973. Esper, T. Recent Soviet Views of Russian Absolutism. — Canadian-American Slavic Studies. VI No 4, 1972.
- (5) Чистовиков, А. Н. Некоторые аспекты проблемы генезиса абсолютизма. — Вопросы Истории 1968 № 5 с. 46—62.
- (6) Там же, с. 49.
- (7) Там же, с. 52. 中東欧及びスウェーデンについては「絶

対主義的統治形態」というタームが用いられ、固有の「絶対主義」とは区別されている。

- (8) Там же, с. 53—54.
- (9) Там же, с. 54.
- (10) Там же, с. 54—56.
- (11) Там же, с. 58. 上の批判は具体的な研究を指してはなすが、他の指摘と併せて考えるところにポルンヤネフ (Porsnev, B. Ф.) の「農民闘争一元論」への批判が意図されているように思われる。注(26)参照。
- (12) Там же, с. 62.
- (13) Anderson, P. Lineages of the Absolutist State. London, 1974. アンダーソンはヘギリヌの「新左翼」の理論的指導者であり、狭義の歴史家ではないが、本書と同時に発表された Passages from Antiquity to Feudalism. London, 1974 の「反響をよび」我が国でも翻訳された。『古代から封建へ』青山吉信、ほか訳(刀水書房、一九八四年)
- (14) Ibid., pp. 15—19.
- (15) Ibid., pp. 195—198. アンダーソンは明記していないが、「軍神崇拜」などの概念はスウェーデン史家ロベール・ロバートソン著の「スウェーデンの歴史」(1956)——Essays in Swedish History. Minneapolis, 1967. pp. 195—225.
- (16) Anderson. op. cit., pp. 198—202.
- (17) Ibid., pp. 202—212.

(18) Ibid., p. 202. ススインについては、アンダーソンは西
 欧に与えたインパクトという点でスウェーデンのそれに比
 較できるが、この点については研究に着手されていない、
 と述べている。p. 198.

(19) Чистозонов, А. Н. Генезис капитализма: проб-
 лемы методологии. Москва, 1985, с. 117—122.

(20) Там же, с. 120—121.

三

チストズヴォーノフ、アンダーソンという二人のマル
 クス主義史家による「東欧の絶対主義」論は、非マルク
 ス主義史学（あるいはブルジョアの歴史学）にどのよう
 に受けとめられたのか、本節ではこの点について若干の
 コメントを付しておこう。アンダーソンの著作は、一九
 七六年にフランス語訳、一九七九年にドイツ語訳が各々
 刊行されて、その評価はさて置き、広く専門的研究者の
 間で知られている。⁽²¹⁾ 他方、チストズヴォーノフの論文に
 ついては、その基本的見解をごく簡単に要約した一九七
 三年のドイツ語論文を媒介として知られているにすぎな
 い。周知のように、彼は一九八一年度の「日ソ歴史学シ
 ンポジウム」(第五回)に來日、報告したが、その内容

は西欧の絶対主義に限定されたものであった。⁽²²⁾ したがっ
 て二人の見解に対して正面から批判的検討を加えたもの
 は、これまでのところ皆無であるが、西ドイツのK・デ
 ッパーマンの論文「プロイセン絶対主義と貴族——マル
 クス主義的絶対主義理論との対峙」⁽²⁴⁾は、東ドイツの歴史
 学を批判するなかで、両者の見解にも言及している唯一
 の文献であると思われる。まずこの論文の批判点を取り
 上げることにしよう。

デッパーマンは、まず中東欧における絶対主義の成立
 を導いた原因についてのチストズヴォーノフ(及びK・
 フェッター)の見解を次のように要約する。中東欧の遅
 れた諸国家は、経済的により高度に発展した西欧諸国に
 よって搾取され、半植民地的状態に陥りたくなければ、
 「上からの改革」の実施を余儀なくされた。プロイセン、
 オーストリア、ロシアの絶対王政は、可能な限り封建的
 残余の最大限を維持し、同時に資本主義の発展のために
 一定の可能性をつくり出すために形成されたのであり、
 したがって対外的諸影響によって決定的に開始されたの
 である。この過程で貴族とブルジョアジーは、その性格
 を変えた。貴族は部分的にブルジョワ化し、企業家、官

僚の生活様式を受け継いだ。他方、ブルジョワは国家による保護、奨励のおかげで、また形成途上の工場プロレタリアートに直面して、その「革命的勢い」を失った。彼らは社会的及び経済的諸問題の解決を国王との取引によって、改革と妥協によって得ようとしたのである。以上のように要約した上で、デッバーマンはチストズヴォーノフを次のように批判した。即ちブランデンブルグ・プロイセンとロシアにおける軍事、行政、経済の改革の出発点は「一七世紀のスウェーデンの強力な拡張」、という「刺激」にあったのだが、チストズヴォーノフは、奇妙なことにこれを「見落した」。これは偶然ではない。けだし、彼は経済的観点からスウェーデンをヨーロッパの後進的諸国家に加えており、「それ故彼の理論には相応しくないからである」。

次にデッバーマンは「東ドイツの歴史学において支配的な」、プロイセン絶対主義の成立に関するもう一つのテーゼ、即ち絶対主義国家とその常備軍が国内の反抗的な反封建的階級を抑え込み、更に隣接の諸国家を略奪するという貴族の利益のために形成された、という見解に批判を加える。この見解は、典型的にはG・ハイツの論

文に示されている⁽²⁶⁾。デッバーマンによると、プロイセン絶対主義の成立と確立の時期である一六四〇—一七四〇年の間に、この地域では一つの大きな農民蜂起も発生しなかった。ハイツ自身も、農民の行動が例外なく、個々の封建的搾取に向けられた自然発生的で、ローカルな、即ち「階級闘争の低次の諸形態」であることを認めている。更にここでデッバーマンは、注記の形ではあるが、アンダーソンの見解を取り上げ、次のように批判した。大選帝侯のもとのプロイセン絶対主義の形成についてアンダーソンが挙げた二つのモメント、即ちスウェーデンの拡張の圧力そして農民蜂起のうち、後者については彼の見解には「落度がある」。けだし、「農民蜂起のために大選帝侯が彼の常備軍を形成したという、いかなる史料も私が見る限り存在しないし、ブランデンブルグの貴族の長い間の抵抗は、このテーゼに反対している」からである。プロイセン絶対主義に関して「アンダーソンの著作の主要な欠点は、……ホーエンツォレルン王朝の利害とブランデンブルグ・プロイセン貴族のそれとの間の甚だ重大な相違を過少評価している」点にある⁽²⁷⁾。デッバーマンは、こうして貴族の対外政治への無関心と現状維

持の志向に対して、三十年戦争の荒廃と無力の経験から、分散し、崩壊に脅かされているラントを一つの全体国家に統合して、軍事的にも経済的にも強力な、西欧諸国に比肩しうる権力国家をつくり出そうとする大選帝侯以下の「王朝的利害」にプロイセン絶対主義の原動力を認めた。そして「この発展への刺激は外から、とりわけスウェーデンの拡張によって生じた」のであり、農民蜂起のモメントは、まったくの問題外とされたのである。⁽²⁸⁾

デッバーマンの批判は、具体的にプロイセン絶対主義に即したものはあるが、「東欧の絶対主義」という枠組については何もふれていない。あるいは「絶対君主政の成立のための社会的前提としての古い貴族と近代的ブルジョアジーとの間の力の均衡というマルクス主義の古典学者の主張は、西欧でも、中東欧でも当て嵌まらない⁽²⁹⁾」、という指摘からそれに否定的な姿勢を読みとるべきかもしれない。だがこの点は措いて、最後にデッバーマンとアンダーソンの指摘が一致した、一七世紀スウェーデンの拡張の問題について、より広いベースペクティヴから接近しているK・ツェルナクの見解を紹介することにしよう。けだし、ツェルナクの設定する「北東ヨー

ロッパ」という概念から、我々はスウェーデンを西欧諸国に含めるといふ地理的にはかなり無理な枠組から解放されるのみならず、その拡張を何か突然の、外からの攻撃という皮相な理解に対して、本質的な修正を迫っているからである。

一九七四年に発表されたツェルナクの論文「初期近代の歴史的画期としての一五五八年から一八〇九年までの北方戦争の時代」⁽³⁰⁾の骨子は、おおよそ次のように要約できる。一七一―一八世紀のヨーロッパ北東部をみる時、一六一八年の段階ではこの地域の主導的勢力がポーランドとスウェーデンであったのに対して、モスクワのツァーリの国家とブランデンブルグ選帝侯は、それらの背後にあって目立たない「周縁的なファクター」にすぎなかった。だが約一世紀後、この地図は完全に塗り変えられる。ロシアは、一八世紀初めの大北方戦争の地すべりの勝利によって「領土のうえではバルト海まで、影響面ではワルシャワまで」その勢力を伸長し、一七〇一年に王国となったプロイセンは、一七二一年には自動的に「大陸東部における第二の権力」へと上昇した。これはバルト海の二つの「古い覇権」の衰退から生じた。「バルト海帝

「国」スウェーデンは、大北方戦争の敗北により崩壊し、ポーランド共和国はその軍事的、権力政治的競争の無能力の故に没落した。ヨーロッパの北東部は、以上のように当時一つの国際的な権力体系システムを構成していたのである。こうした体系が形成された契機は、リヴォニア戦争（一五五八—一八三）であった。この拡張をそそる「権力の空地」(Macht Vakuum)リヴォニアの獲得をめぐって繰り広げられた戦争（第一次北方戦争）には、近代国家史に特徴的な諸要素、即ち覇権のための闘い、帝国の拡張、北東部の分割、等がはじめて現われ、それは第二次北方戦争（一六五五—一六〇）、第三次北方戦争（一七〇〇—二一）を経て、最終的には、ポーランド国家の解体とスウェーデンの究極的な脱帝国化（一八〇九年のフィンランドの分離）まで存続したのである。⁽³¹⁾

ツェルナクは、こうして初期近代のヨーロッパの重要な構成要素としての北東部の「バルト海諸国家体系」(Ostseeratsystem)の存在を提示したが、この点についてもう少し具体的にみておこう。一五五八年のリヴォニア侵攻によって刺激を与えたロシアは、その後「動乱時代」の国家的、社会的危機のなかで、逆にポーラン

ドとスウェーデンにとつての「拡張をそそる権力空間」として現われた。海岸線の支配、という一七世紀スウェーデンの権力政策によって、ロシアはバルト海から切り離されたのである（ストルボヴォの和平）。他方、一七世紀前半においては経済的にも権力政治的にもスウェーデンの主要なライヴァルであったポーランドは、第二次北方戦争における軍事的敗北の結果、分割に脅かされる北東部の「最も弱い部分」へ転化した。スウェーデンによる分割意図は、諸国家の干渉によって挫折したが、ブランドンブルグはプロイセンの主権を獲得するとともに、スウェーデン、モスクワに次いで貴族共和国の「第三の敵」に成長したのである。そして「大きな、第三の北方戦争」におけるロシアの軍事的勝利によって、バルト海領域におけるスウェーデンの優位が排除された。「バルト海帝国」は崩壊した。ロシアがこの地域で優位を確立するためには、ニシュタットの和平以後、なお一世紀足らずを必要としたが、最近二世紀の東ヨーロッパ史における「最もロシア的な時代」の源は、第三次北方戦争に求められるのである。⁽³²⁾

ツェルナクの「北方戦争の時代」には、「東欧の絶対

主義」論への言及は一切欠けている。絶対主義というタームさえ、例えば「君主の絶対主義は、北東でもまた作用していた」、ブランデンブルグ＝プロイセンの大選帝侯の手による「上からの絶対主義革命」、等のように「一、三度用いられているにすぎない。(33) したがって我々がこの論文から採取すべき点は、初期近代における北東ヨーロッパ地域の固有の在り方、ツェルナクのいわゆる「バルト海諸国家体系」の存在であり、スウェーデンの拡張もまた、この枠組のなかで理解されねばならないことであろう。そしてスウェーデンの一方的な軍事的脅威のみならず、プロイセン、ロシアによるその先進的な軍制の積極的な導入、といった側面を考慮に入れる時、「東欧の絶対主義」論は、更に豊かなものになるであろう。(35)

(21) Anderson, P. L'Est absolutiste. Ses origines et ses voies. 2 vols. Paris, 1976. Die Entstehung des absolutistischen States. Frankfurt am Main, 1979.

(22) これは一九七一年一月にブランデンブルクで開催された「中期後期ヨーロッパの階級闘争」の国際シンポジウムでの報告である。Ciszovonov, A. N. Über die stadtial-regional Methode bei der vergleichenden historischen Erforschung der bürgerlichen Revolutionen des 16.—18. Jahrhunderts

in Europa. — Zeitschrift für Geschichtswissenschaft. 1973 No 1 S. 31—48. Ciszovonov, A. N. О stadial'no-regional'nom izuchении буржуазных революций XVII—XVIII вв. в Европе. — Новая и Новейшая история 1973 № 2 с. 86—99. この論文は、一九八五年の論文集にも収められている。注(19)参照。

(23) ナストヌツキーンフ「西ヨーロッパの絶対主義の形成と諸類型」木下康彦訳、『史潮』新一三号、一九八三年。

(24) Deppertmann, K. Der preussische Absolutismus und der Adel. Eine Auseinandersetzung mit der marxistischen Absolutismustheorie. — Geschichte und Gesellschaft. 1982 H. 4 S. 538—553.

(25) Ibid., S. 541—542. 但し、キヤンパーマンはナストヌツキーンフに引いては「ドイツ語論文のみを取り上げているが、その中には、スウェーデンに引いて、よくに言及されている。したがって、キヤンパーマンの批判は、彼自身の見解をその卒直に語っていると思われる。」Ciszovonov. Über die stadtial-regional Methode. S. 46.

(26) Heltz, G. Der Zusammenhang zwischen den Bauernbewegungen und der Entwicklung des Absolutismus in Mitteleuropa. — Zeitschrift für Geschichtswissenschaft. 13, 1965 には、最近の論文集に収められた。Schulze, W (Hg.) Europäische Bauernrevolten der frühen Neuzeit. Frankfurt am Main, 1982 S. 171—190.

- ハイツは、プロイセンにおける絶対主義の形成の前提として、弱体とはいえブルジョワの成長がみられた点を指摘しているが、基本的にはソ連のホルンシュエフ理論に依っている。ホルンシュエフの見解については現在の評価は Schütze, op. cit., S. 14—18. Zagorin, P. *Rebels and Rulers*, 1500—1600. Cambridge, 1982 vol. 1 pp. 214—227. 参照。
- (27) Deppermann, op. cit., S. 542—544. 但し、マンナーソンは「二つのキメントを同列に論じている訳でなく、対外的脅威の方により強いキメントがある。」
- (28) *Ibid.*, S. 545—546, 553.
- (29) *Ibid.*, S. 552—553.
- (30) Zernack, K. *Das Zeitalter der nordischen Kriege von 1558 bis 1809 als frühneuzeitliche Geschichtsepoche.* — *Zeitschrift für historische Forschung*, 1974 H. 1 S. 55—79.
- (31) シェルナクによれば、バルト海地域におけるこの時代の歴史的関連、建設諸要素が解体されたのち、「ロシア皇帝國的に形造られた東ヨーロッパ史の近代」が始まるのである。 *Ibid.*, S. 55—56, 62—63.
- (32) *Ibid.*, S. 58, 63—71, 78.
- (33) *Ibid.*, S. 67.

- (34) ツェルナクは「一七世紀後半のロシア＝スウェーデン關係から研究歴をはじめ、この時期の両國の政治史、國際關係についての多くの著作がある。」Zernack, K. *Studien zu den schwedisch-russischen Beziehungen in der 2. Hälfte des 17. Jahrhunderts*, Teil 1. *Die diplomatischen Beziehungen zwischen Schweden und Moskau von 1675 bis 1689*. Gießen, 1958 ditto. Schweden als europäische Großmacht der frühen Neuzeit. — *Historische Zeitschrift*, Bd. 232, 1981 S. 327—357.
- (35) 卒業稿後、Kunisch, J. *Absolutismus. Europäische Geschichte vom Westfälischen Frieden bis zur Krise des Ancien Régime*. Göttingen, 1986 を入手した。小著ならびに最終章 (S. 179—202) はオランダ主義史学を含めた研究動向がなされている。また Subtelny, O. *Domination of Eastern Europe. Native Nobilities and Foreign Absolutism, 1500—1715*. McGill-Queen's University Press, 1986 には「バルトス主義史学に批判的な立場から」この時期の東欧の絶対主義——基本的性格は「西欧と同一——をめぐる興味深い諸問題が検討されている。

(一橋大学助教授)